

説  
林

## 幼稚園保姆に望む

或人はいひます、幼稚園の保姆などは何も教へるのではなし、高が乳臭い幼子を遊ばせて行くのが役で、どうして學問も見識も要つたものではない。又或人の申すには、名が既に保姆である即ち乳母である、だから保姆といふ名前からして改良しなければ、どうしても幼稚園を重く考へさせることは出来ない。先こんなことを申す人が世間に随分ある様です。

これ等の言葉は表面通りに解釋しますれば、誠に淺白な言ひ分で、もとより取るにも足らない議論であるのですが、無論言ふ所の人は表面通りに意味してゐるのに違ひない。淺白極まる考へからして、一向取るにも足らない、こう云ふ議論を致さるゝは、夫は致し方がないとしても、肝心の幼稚園保姆其人に、時どすると右の様な間違つた考へを持つたるゝ人がある様では、誠に容易ならぬことゝいはなければなりません。

何も教へるのではない、言はゞ乳臭い幼子を遊ばせて行くに過ぎない、勿論幼稚園は學科の智識を教ふる所ではありませぬ。然しながら智識を教へないからと申して果して學問も見識も要つたものでないでしやうか？ 幼兒を遊ばせて行く、無論夫に相違がないです、けれども如何に深い意味が遊

ばせて行く<sup>△△△△△</sup>と云<sup>△△△△△</sup>ふ語<sup>△△△△△</sup>の中に含まれて居<sup>△△△△△</sup>ましよう！  
 ？實際<sup>じつじ</sup>に實物<sup>じつぶつ</sup>に當<sup>あた</sup>つての五官<sup>ごくわん</sup>の練習<sup>れんしゅう</sup>、知覺<sup>ちかく</sup>力<sup>りき</sup>の練習<sup>れんしゅう</sup>、記憶<sup>きき</sup>想像<sup>さうぞう</sup>の教育<sup>けいふ</sup>一言<sup>いちごん</sup>しますれば知識<sup>ちしき</sup>の啓發<sup>けいはつ</sup>は言<sup>い</sup>はず、人間<sup>にんげん</sup>生活<sup>せいかつ</sup>に最<sup>もつと</sup>重要<sup>じゅうよう</sup>なる習慣<sup>しゅうかん</sup>の形成<sup>けいせい</sup>といふ様な<sup>よふ</sup>ものが、頗<sup>よこ</sup>る其要素<sup>そのようそ</sup>をなして居<sup>ゐ</sup>ることを氣付<sup>きづ</sup>かさせぬか？習慣<sup>しゅうかん</sup>の形成<sup>けいせい</sup>！これほど大切<sup>たいせつ</sup>なものが果<sup>はた</sup>してどこにありましようか？道德<sup>どとく</sup>といふ語<sup>な</sup>も其原語<sup>そのもとご</sup>をいへはつまり習慣<sup>しゅうかん</sup>といふ語<sup>な</sup>で、無論<sup>むろん</sup>今日<sup>こんにち</sup>でもそうなくてはなりますまい。習慣<sup>しゅうかん</sup>を形成<sup>けいせい</sup>するのは所謂<sup>いはゆる</sup>乳臭<sup>ちゆうきう</sup>の時<sup>とき</sup>が、第一<sup>だいいち</sup>番<sup>ばん</sup>で、これが幼子<sup>ようし</sup>を遊ばせて行く<sup>△△△△△</sup>中に最<sup>もつと</sup>注意<sup>ちゅうい</sup>して得<sup>え</sup>なければならぬ結果<sup>けつこ</sup>でしよう。善良<sup>ぜんりやう</sup>なる習慣<sup>しゅうかん</sup>と豊富<sup>ほうふ</sup>なる智識<sup>ちしき</sup>とは人生<sup>じんせい</sup>に於<sup>お</sup>て何れも軒輊<sup>けんち</sup>があらうとはいへぬ、否<sup>いな</sup>何れかを擇<sup>えら</sup>べといはるれば、私は寧<sup>わづ</sup>前<sup>ぜん</sup>者<sup>しゃ</sup>を取<sup>と</sup>らうと思<sup>おも</sup>ひます。これほど重要<sup>じゅうよう</sup>な結果<sup>けつこ</sup>を豫期<sup>よき</sup>せられて居<sup>ゐ</sup>る

子供<sup>こども</sup>を遊<sup>あそ</sup>ばせることに於<sup>お</sup>て、保母<sup>ほむ</sup>たる人<sup>ひと</sup>が果<sup>はた</sup>して智識<sup>ちしき</sup>も見識<sup>けんしき</sup>も要<sup>い</sup>らないと申<sup>まを</sup>されましようか？

又保母<sup>またほむ</sup>といふ名前<sup>なまへ</sup>がいけないと申<sup>まを</sup>すこと、これは或點<sup>あるてん</sup>から申<sup>まを</sup>すと如何<sup>いか</sup>にも穩當<sup>えんだう</sup>でない所<sup>ところ</sup>もある様<sup>よう</sup>です。併<sup>しか</sup>したゞ前申<sup>ぜんしん</sup>した様な<sup>よう</sup>意味<sup>いみ</sup>からならば、何<sup>なに</sup>も別段<sup>べつだん</sup>氣にするにも及<sup>およ</sup>ばないので、名<sup>な</sup>はたとひと<sup>もつとも</sup>うあらうとも其實<sup>そのじつ</sup>國民<sup>こくみん</sup>を仕立<sup>した</sup>てる上<sup>うへ</sup>に於<sup>お</sup>て、最<sup>もつとも</sup>大切な職務<sup>たいせつなしよくむ</sup>を盡<sup>つく</sup>されて居<sup>ゐ</sup>ることを自覺<sup>じかく</sup>せられ、又<sup>また</sup>社會<sup>しやかい</sup>もそこに氣<sup>き</sup>が付けば一向<sup>いっそう</sup>構<sup>かま</sup>はないことでもございまいしょう。

そこで名稱<sup>なめい</sup>などは、何<sup>なん</sup>でも宜<sup>よろ</sup>しい。其實<sup>そのじつ</sup>諸君<sup>しよきん</sup>は前に述<sup>の</sup>べた様な<sup>よう</sup>最<sup>もつと</sup>重要<sup>じゅうよう</sup>なる教育<sup>けいふ</sup>の一部分<sup>いちぶぶん</sup>を負擔<sup>ふたん</sup>せられて居<sup>ゐ</sup>るのであります。だから從<sup>したが</sup>つて夫<sup>それ</sup>に相當<sup>たいがう</sup>な學力<sup>がくりき</sup>と見識<sup>けんしき</sup>を備<sup>そな</sup>へなければならぬ。育兒<sup>いくに</sup>學<sup>がく</sup>宜<sup>よろ</sup>しい、兒童<sup>じどう</sup>研究<sup>けんきゅう</sup>宜<sup>よろ</sup>しい、保育<sup>ほいく</sup>學<sup>がく</sup>最<sup>もつとも</sup>可<sup>よ</sup>なり、併<sup>しか</sup>れ

ども其他一般の科學殊に最教育學を研究しなけれ  
ばなりませぬ。從來の傾向を見ますれば、幼稚園  
保母は先づ何を捨てゝも保育學所謂キンデルガル  
テン、ペダゴギックをやらなければならぬ。  
所で此保育學と申すものゝうちには何人にも知る  
ことの出来ない、申さば幼稚園の虎の巻とも稱せ  
られる様な恩物の一科があります。是さへ通曉れ  
ば殆ど他の學科は脩める必要がないかの様に考  
へて居られた。此傾向は強我國だけではありま  
せぬ、歐洲諸國で在つても矢張り通りなのであり  
ます。即教育學や心理學や体操や、こんなもの  
はどうでも宜い、何でも保育學さへやれば宜ひと  
申す様な次第で、此傾向がやがて保育學——幼稚  
園教育といふものを普通の教育から尤で特別のも  
のとして仕舞つたので、これが即總べての教育的

方面が既往半世紀間に於て屢々として發達進歩し  
たのにかゝはらず 依然として舊態を改めない譯  
であらうと考へます。

然るに幼稚園保育と申すも、矢張り將來の人格を  
造るのが目的で、どうしても教育の範圍に在らな  
ければならぬので、其根本的理法はどこまでも  
教育學の原理から割り出されなければならぬ。  
近來米國の一二の雜紙に見ゆる幼稚園に關する論  
争はやがて普通の教育學の原理と幼稚園保育の理  
法との衝突と云ふ此間の消息を洩らしたものであ  
りますまいか？ 此論争は何れ他日稍詳に御紹介  
する機會があらうと思ひますが、兎に角幼稚園保  
育法の理法は、教育の原理から導かれなければ到底  
改善させる譯には参りません。

幼稚園の保育法には 到底改善すべき點が多い。

併るに五十年間も他に後れて、舊態の儘を存して居つたと申すは、つまり教育學者が幼稚園保育を知らず保姆が教育學を度外にした結果に外ならぬのであります。幼稚園の効果は彼の淺白者流の申す様ではありませぬ、併も今日多數の幼稚園に於ては、其儘では頗怪しいものが多い。其改善すべき點は容赦なくどし／＼改善して以て當然收めるべき効果を收めなければなりません。而してこの改善は即現に保姆其人に俟たねばならぬ。そこで保姆諸君に向つては是非とも他の科學殊に教育學の原理方法に付きて最十分なる研究をなされんことを望む次第であります。教育學を單に小學校教員の専有だと考へて、一向に其方に着目せられないのは、決して自家の職務に忠なるものとは申されませぬ。

## 愚痴と

### 取越苦勞

愚痴とか取越苦勞とか聞けば、直に女といふことを思ひ起します。これは實際つまらぬ愚痴をこぼしたり、取越苦勞をしたりする女が多いからであります。

皆さんは、かういふことを聞きになつたでしょう。

「あゝこんどの入學試験に落第したら、どうしよう」

「あんなに、よくたのんで置たのに、なぜこんな大きなふきにしたでしょう、ほんとにしようがない」

「昨日お天氣であつたら何さんの家に行かれ